

令和4年度 矢掛町立矢掛中学校学校評価書

校長 小野 秀明

本校のミッション
ふる里を愛し、社会の持続的な発展に貢献する生徒を育てる。 友愛を重んじ、自分らしく幸福な人生を切り拓いていく生徒を育てる。

学級数	11	学級	児童(生徒・園児)数	254	人
職員数	25	人	家庭数	227	戸
学校運営協議会委員	岡本 邦広(学識経験者・新見公立大学 教授) 川上 公一(学識経験者・元県立矢掛高等学校校長) 高月 秀人(学識経験者・県立矢掛高等学校校長) 藤原 立志(地域住民・学識経験者・元小学校長) 守屋 玉枝(地域住民・スクールサポーター) 古城賀津子(地域住民・地域コーディネーター) 小川 千景(保護者・矢掛中学校PTA会長) 中川 裕之(保護者)				

A 成果をあげている B ほぼ成果をあげている C あまり成果をあげていない D 成果をあげていない

領域	中期目標	単年度目標	具体的計画	達成基準	自己評価	評価
1	ICTを活用しながら、主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業改善を図る。	ICTを活用しながら、主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業改善を図る。	・ペアやグループ活動による学び合い学習を取り入れ、相互に関わり合える場面を設定し、協同して課題を解決することで活用力を育む。	・ペアやグループでの活動を通して、85%以上の生徒が互いを尊重し合い、仲間の意見をきちんと受け止め、自らの考えを進んで発表している。	ペアやグループ活動による学び合い学習で、約96%の生徒が互いを尊重し合い、仲間の意見をきちんと受け止め、自らの考えを進んで発表しようとしている。今後も協同して課題を解決することで活用力を育むことが大切である。	A
			・各教科の授業で、タブレット端末を効果的に活用できるように研修し、授業改善を図る。	・情報の共有や発信をする際に、90%以上の生徒が必要に応じてタブレット端末を活用し、互いの意見を尊重しながら自己の学習を調整している。	情報の共有や発信をする際に、約93%の生徒が必要に応じてタブレット端末を活用し、互いの意見を尊重しながら自己の学習を調整しようとしている。今後も授業で効果的に活用できるよう、研修および授業改善を図ることが大切である。	
			・授業と家庭学習がつながるように工夫する。	・85%以上の生徒が、授業の予習や復習を家庭学習として取り組んでいる。	授業の予習や復習を約80%の生徒が家庭学習として取り組んでいる。今後は、授業と家庭学習がつながるよう「準備学習」を提示するなど、より具体的に工夫していくことが大切である。	
2	確かな学力を身につける。	・学習習慣の確立を図る。	・「うちべん」で家庭学習を定着させる一助とする。	・85%以上の生徒が自主学習「うちべん」に取り組み、毎朝提出することができている。75%以上の生徒が「日付」「めあて」「時間」を記入し、計画的に学習できている。	約91%の生徒が自主学習「うちべん」に取り組み、毎朝提出することができている。また、約78%の生徒が「日付」「めあて」「時間」を記入し、計画的に学習できている。今後は「うちべん」を家庭学習定着の一助としていくことが大切である。	A
			・家庭と協力して、年3回の矢掛町家庭学習強化期間の取組を充実させる。また、保護者が適切に支援できるように、学校だよりや学年だよりで啓発していく。	・矢掛町家庭学習強化期間には、家庭学習計画をたて、80%以上の生徒が90分以上の家庭学習に取り組むことができている。 ・学年だよりを月に1度出し、保護者の支援を啓発する。	矢掛町家庭学習強化期間には、家庭学習の計画をたて、約77%の生徒が90分以上の家庭学習に取り組んでいる。今後は、家庭と協力して、より主体的な学習として取り組みを充実させることが大切である。学年だよりを月に1度出し、保護者の支援を啓発することができている。今後も継続していくことが大切である。	
			・地域の資源を活用する中で、1学年は地域を学ぶ、2学年は地域で学ぶ、3学年は地域・社会に貢献するという観点で、系統的に取り組む。	・「総合的な学習の時間」に、85%以上の生徒が、自ら課題を設定し、調べたことをまとめ、自分の考えを深めるとともに、まとめや考えを聞く人になるように伝える(発表する)などの学習活動を通して、地域に貢献しようとする態度が身につけている。	1年生で伝える手段(ポスターセッション、新聞発表等)の基本を学習し、課題設定→調べ学習→まとめ→発表のかたちを行うことができた。 2年生では自分が体験したり、見聞したりしたことを各自でタブレットを使ってスライドにまとめ、自分の言葉で発表することができた。地域の職場について写真などを使って他の生徒たちにわかりやすく伝えることができた。 3年生はわかプロ(地域貢献活動)を通じてグループごとに課題を設定し、活動したりまとめを発表したりすることができた。活動については縦割り取り組みができて全学年で達成感を感じることができた。	
3	総合的な学習の時間を系統性のある取組にする。	・学び合い学習を通して、聴き合える、伝え合える、繋がり合える学級づくりに取り組む。	・どの教科でも班による協同学習にスムーズに取り組むことができている。	約90%の生徒がグループなどの話し合いに積極的に参加しようとしている。自分の意見を言うことができていると実感している生徒は73%いて、多くの生徒が協同学習や話し合い活動に意欲的に取り組んでいる。今後も主体的に学習できる場を設定し、生徒の発言を促していくことが大切である。	A	
			・学校行事、学年行事、学級活動などを通して、認め合える、繋がり合える学級づくりに取り組む。	・行事や学級活動において、協力して一つのことに取り組むことにより、互いを思いやり認め合えるクラスづくりに取り組んでいる。		今年度はコロナで休止されていた行事が復活し、92%の生徒が学校や学年行事に積極的に参加したと答えた。行事や学級活動を通して、人間関係を深めていけるよう、引き続き取り組んでいきたい。
			・「Good Behavior」チケットの配付や期待される行動の明示など、SWPBIS(学校全体における積極的行動介入および支援)の取組を推進し、生徒の自己肯定感を高めるとともに、生徒や保護者との信頼関係を構築する。	・学級ではGood Behavior チケットを用いた良いところ探しを学期に一度程度行い、お互いを肯定して認め合えるクラスづくりに役立っている。また、生徒はよい行いとは何かを把握し、積極的に行動しようとしている。		友だちの良いところをGood Behaviorチケットに書いて渡す活動を学期に一度行い、87%の生徒が「もらってうれしかった」と前向きに受け止めている。お互いを認め合う行動につながっていると考えられる。今後も引き続き学級活動の一環として行っていきたい。
4	支え合う生徒	・認め合える、支え合える、繋がり合える集団づくりをする。	・年3回のアセスを活用し、生徒個人の課題分析や変容の把握をする。学年内で情報の共有をし、支援の方策を構築する。	・アセスによって支援の必要な生徒や学級の特性を理解し、学年で共有し、学習指導や生活指導に活かすことができている。	学期ごとにアセスアンケートを行い、数値やその推移を学年で把握することによって、生徒の実態や注目すべき生徒について共有することができた。特に学習や学校生活に困難を抱えている生徒の把握に役立っている。今後も学年、学校全体で生徒の実態を把握して指導していくことが必要である。	A
			・教師が意識して生徒会や専門委員会の活動で、矢掛中学校三つの誇りが実践できるようにする。	・矢掛中学校の生徒に身につけてほしい力を考え、それらを養うための活動を生徒会と専門委員会が連携して実行できている。	生徒会のしくみを変えることができたので、専門委員会の活動が行いやすくなる。学校の課題を各委員会が取り組めるようにしたい。	
			・情報モラル教育を充実させ、情報端末(スマートフォンを含む)を、正しい判断力を持って使えるようにする。	・学級活動において情報モラルについての授業を年2度は行い、生徒は正しい判断で端末やSNSを利用することができている。	SNSの利用の仕方は、繰り返し問題点を提起しながら判断力アップを図りたい。	
5	地域や社会の課題を見だし、それらに必要能力や態度を身につける。	・「地域を支える学校」として、生徒が自主的に地域の活動に参加するよう支援し、参加の状況を積極的に公開する。	・学校生活に関するアンケートにおいて「地域の活動(ボランティア等)」に参加している」の項目に70%以上の生徒が肯定的な回答をしている。	地域について考える活動は十分にできている。住み続けることができるまちづくりを中心に学習していきたい。学校生活に関するアンケートにおける「地域の行事やボランティアに参加している」の項目では、肯定的な回答が1年39.1%、2年40.7%、3年52.7%となり、目標の数値には達しなかった。地域の各事業所等で行われた夏のボランティアには全校の64%(164名)の生徒が参加した。総合的な時間に取り組んだ地域貢献活動「わかプロ」では、地域のにぎわい創出、地域のつながりの強化をめざして各種イベントや出店を全校で企画・運営しSDGsに関連した活動を行うことができた。	A	
			・ESD教育の一環として、SDGsの視点から地域の問題について考える学習を各学年一回以上実施する。	・6月にすべての小学校で出前事業を実施し、9月には中学校で体験授業を実施した。2月の新入生説明会の際にも体験授業を実施する予定である。11月には人権教育研究会を中学校で開催し、小学校の先生方に授業を参観していただいた。 来年度、特別支援学級に入学を考えている小学校6年児童は、小学校の先生と連携を取り、中学校の見学をすることができた。 自立支援室の生徒について、日々の状況(生活記録)を毎週の生徒指導委員会で報告、各学年で回覧等により情報を共有することができた。週1回来校のSCやSSWとも直接の情報交換ができ、関係者との連携がスムーズに行えた。町の福祉課や児童相談所とのケース会議もタイムリーに設定でき、早期の対応による課題解決も図れた。		
			・自立支援室指導において、個々の生徒の状況に応じてICT活用や授業配信を積極的に取り入れ、学習支援・生活支援を行う。	・時間割の中に素素の教科指導も組み入れながら、担当教員が必要とされる授業について、教科担当と細かに連携が図れている。生徒のニーズに添い、数学や英語を中心にオンライン授業が定期的実施できている。		学習に向き合える生徒が少なく、オンラインの定期的な授業連携はできなかった。ただ、集会等の行事や総合的な学習の時間においては、たびたび実践でき、生徒の学習や生活に一定の効果を実感できた。音楽や技術等の教科指導も個別に継続できたり、体育(卓球やバドミントン)においては、時間割外にも設定したりして、生徒の入室への意欲を高めることに繋がった。
6	生徒の支援	・学校生活に適応できるように個別の支援を充実する。	・簡素化を図った「自立支援室アセスメントシート」により、担任・学年のみならず、全職員で情報が共有されている。	アセスメントシートの簡素化への取組は、まだなお試作段階で、引き続きの課題として取り組んでいきたい。	A	
			・教育相談や学校生活アンケート、生活ノートにより、生徒に関する情報を集めたりすることで、困り感やいじめの早期発見、早期対応に努める。	・担任と生徒のつながりを学年内でも共有し、日常的に生徒の話が交換されるなど、高いアンテナが張り巡らされている。(月1回以上の学年会)		生徒に関する情報は、学級(担任)内で滞ることなく、常に学年や全校での共有ができ、迅速な課題解決や対応ができている。
			・定期的に教育相談委員会をひらき、情報共有を行う。	・毎週の生徒指導委員会や学年会、出欠状況等の把握により、定期的な情報共有の場が確保できている。		日々の情報共有や課題への迅速な対応により、改まった会議の必要性が感じられず、定期的な会議を設定することはなかった。
7	特別支援教育の充実を図る。	・特別支援教育コーディネーターを中心に、教職員や支援員が密に情報を共有し、個別の支援を充実させる。	・教職員と支援員の情報共有が密になされ、教職員の各種委員会でも情報共有の場が設定されている。	個に応じた支援ができており、支援員の方との情報共有もできている。 職員会議、主任者会では必ず情報共有がなされ、次年度へ向けた適切な対応について検討することができた。	B	
			・関係機関や専門家、保護者と連携し、個別の支援を充実させる。	・専門指導員派遣事業等を活用し、関係機関や専門家と連携している。 ・保護者と共通理解をもって生徒の支援をしている。		関係機関との橋渡しがうまくでき、保護者の方の思いや願いを引き出すことができた。 専門指導員派遣事業等の活用はできなかったため、今後の課題としたい。
			・特別支援教育に関する校内研修を外部講師により、計画的に行う。	・生徒の実態に応じて、必要な内容の外部講師による研修を行い、生徒理解を深めている。(年1回以上)		生徒の実態を知り、理解を深めるための情報共有はできている。 特別支援学級在籍の小学生の随時の中学校見学をもつことができ、入学時の不安軽減になるものと思われる。 外部講師による研修は、コーディネーターのみが受けることができたので、全職員に実施したい。

分析・改善方策

- ・2年間の人権教育の研究指定により、学校全体での協同学習などの推進をすることができた。今年度は「総合的な学習の時間を系統性のある取組にする。」の部分に力を入れ、3年生を中心に地域貢献活動を縦割りグループにより、全校生徒で取り組んだ。初めての取組であり、試行錯誤しながらの取組であった。さらに計画を綿密にしていく必要がある。来年度からは商品開発を軸に総合的な学習を系統性のある取組にしていく。
- ・課題である不登校対策は、別室担当教諭が、別室の運営だけでなく、関係諸機関や各小学校との連携の窓口となり居場所づくりとして機能している。来年度までの加配であるため、どのように継続していくかを考えていかなければならない。
- ・準備学習や単元テストの導入により、授業改善をさらに進めていきたい。

学校関係者評価

- 1 総論
・コロナ禍の中でも、生徒たちは前向きな生活ができている。生徒は明るい雰囲気でも落ち着いて学校生活が送れている。あいさつもよくできている。校内に素晴らしい合唱が聞こえることに感動した。教育改革を大きく進めようとする校長の姿勢は支持する。
- 2 課題への対応
・不登校は本校の長年の課題である。一層課題の明確化を図ってほしい。不登校生徒数など、個人情報に配慮しながらデータを公開してもよいのではないか。グループ学習やペア学習がよくできている。家庭学習として「自主学習うちべん」は充実してきている。生活ノートと学習ノートを分けたのもよい。オンライン・タブレットを活用した教育については、効果が上がるようにさらに研究を進めてほしい。
人権教育研究の成果が日常の学校生活に生かされている。「Good Behavior チケット」の活動も人権教育の立場からさらに充実することを期待する。
- 3 学校・家庭・地域の連携
・保護者の本音を吸い上げ職員で共通理解するようになってほしい。中高の連携、町全体で子どもを支える活動は積極的になされており、県下のモデルとなる活動であろう。
- 4 学校評価
・分かりやすい自己評価になっている。来年度に生かせる分析・改善方策になるよう、具体的で焦点化された対応策を求めたい。
・「～をした」から、さらに進めて「～をした結果、生徒は～と変わった」と変容の様子を示してほしい。評価項目を精選し教職員の負担にならないようにしてほしい。オンラインでのアンケート集約など効率化をさらに図ってほしい。
・確かな学力と進路指導については、より客観的なデータを示してほしい。

来年度の重点・方針

- 学校教育目標 「自ら考え行動する」
- 学習活動（自律した学習者の育成）
- ①準備学習や協同的な学習による主体的な授業づくり
 - ・準備学習を原則毎時間行い、協同学習に生かす
 - ②単元テストや5時下校を生かした家庭学習
 - ・自ら考えた勉強法でテストに臨むことができる
 - ③総合的な学習の時間での探究学習の推進
 - ・課題を見つけ(選択し)、解決へ向け具体的に行動ができる
- 特別活動（自律した集団の育成）
- ①自ら考え行動する生徒会活動
 - ・人間関係を深める全生徒参加活動を計画・実行する
 - ②生徒が主体的に参画する学校行事
 - ・体育会において、生徒が企画・運営に参加する
 - ③生活づくりへ参画する学級活動
 - ・人間関係づくりのために、生徒主体の学級活動を実践する
- 学習の個性化（個別最適な学び）
- ・クロムブックを毎日持ち帰り準備学習等に活用する
 - ・家庭学習の内容を、生徒が決められるようにする
- 指導の個別化（個に応じた指導）
- ・講師を招へいた特別支援研修会を開催し、指導に生かす
 - ・長期欠席生徒の状況確認を毎週生徒指導委員会でを行う